

107. 小谷城をめぐる城郭(1)

—虎御前山 その1—

1. はじめに

織田信長に、一挙に攻め上ることは難しいと思われた(『信長公記』⁽¹⁾ 卷三) 戦国大名浅井氏の居城小谷城は、その元亀元年(1570年)の最初の攻撃から落城まで3年を要したという。この間信長は姉川合戦をはじめ、小谷城下の「町」の焼き払いなど何度となく浅井久政・長政を苦しめたのであるが、その攻撃最前線の本陣を小谷城の南西にある虎御前山に置いたことはよく知られている。

『信長公記』元亀元年6月21日の項によって、当初虎御前山には一夜陣を構えたことが知られるが、砦として体裁が整えられたのは元亀3年(1572年)のことと考えられ、この年7月27日に砦を嚴重に築くよう信長は命じている。そしてその築城がほどなく終り、信長が入城したという記述があるが、8月28日の大暴風雨によって崩壊したという。文献を信じると、ひと月足らずの短期間に砦としての整備が行なわれたことになる。

しかし浅井氏による小谷城下の経営は、かなり大規模かつ計画的に行なわれていたようで、城下の形成にあたっては周囲を独立丘陵と堀・土塁及び自然河川によって区画し、南北両端に木戸を設けた地域を対象としていたことが想定される。仮にそのとおりとすると、南北3.3km・東西0.8kmの範囲の城下の姿が浮かび上る。従ってこの虎御前山にも信長以前に浅井氏による何らかの防衛施設が築かれていたことは想像に難くない。

虎御前山の巧みに仕上げられた砦の結構なことは今まで見聞きした多くの砦に見られぬもので、見る眼を見張ったようで、信長が座敷から北を見ると浅井・朝倉勢は高峰大嶽へ登ってとりでにこもり、いかにも攻略しがたいようすであったという(『信長公記』卷五)。

こうした記述から虎御前山はもはや砦というより一つの城に近いものであり、信長の座敷もある建造物を備えていたことがうかがえるのである。

元亀3年の崩壊後、信長は新たに八相山に陣を築いたようであるが、天正元年(1573年)には秀吉が虎御前山の守将として居たことなどから、虎御前山もまたそ



第1図 虎御前山周辺

の後整備されたようである。

ここでは虎御前山に築かれた「城」の尾根上の主要部遺構について略述してみたい。

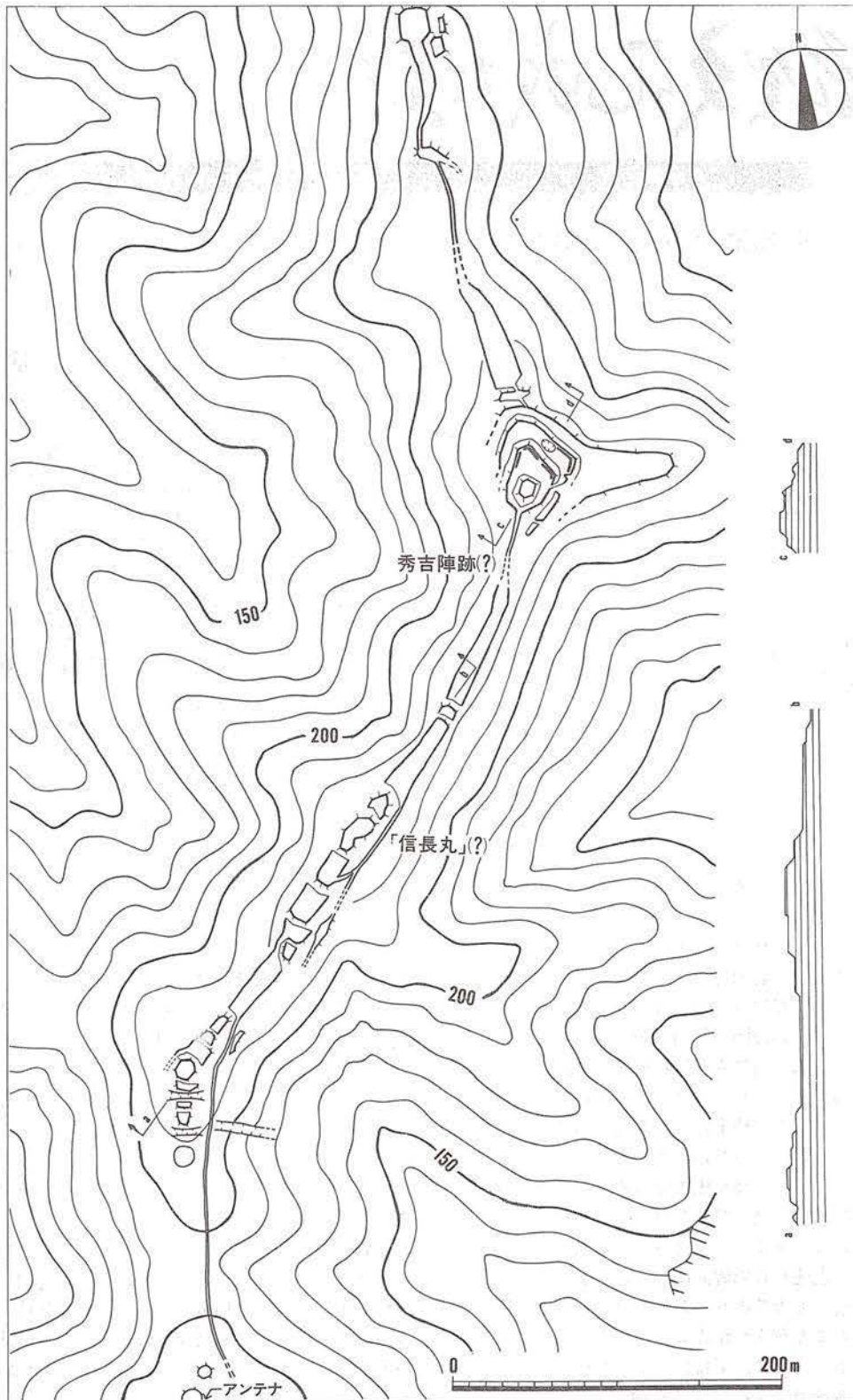
2. 虎御前山の主要部構造

虎御前山は小谷城のすぐ南西にあり、標高224m(比高約130m)を計る独立丘陵で、虎姫山とか長尾山とも呼称する。虎御前山と小谷山の支尾根尾崎山との間は最も近いところで380mしかない。まさに指呼の間に望む位置にある。

『輿地志略』には「此地に一人の美女忽焉として顕れたり、容色類なし。せせらぎ長者娶て妻とす。其名を虎御前という」とある。

虎御前山の尾根は南北に長いが、南端部の標高140mを計るあたりは八相山といい、別称中野山とも言う。『信長公記』でも八相山として区別して呼称しており、先述のように信長は元亀3年(1572年)に虎御前山と横山城をつなぐ押えのため宮部と共にこの八相山に要害を築くよう命じている。

さて現在、虎御前山の南北に伸びる尾根上の中ほど



第2図 虎御前山要図

にはアンテナ施設があるが、そこより北の尾根上に主に良好な遺構が見られる。

アンテナのすぐ北には2基の円墳を利用したと思われる陣跡といわれるところがあり、ここには滝川一益陣の石碑がたてられている。このようにこの南北に長い尾根上には古墳群があり、これを巧みに生かした城郭の構築がなされているようである。その先約130mにある堀秀政陣の碑がある部分も円墳と思われる。その次に2条の堀切があり、これが虎御前山の中心部を画す南端の施設である。また2条の堀切の間の道沿いより下にも1条の幅5mばかりの竖堀が見られる。

虎御前山の中心部は4個所の主要な曲輪を中心とし、それをつなぐように幅は10~20m足らずの曲輪が並ぶ連郭式の様相を呈する。中ほどやや南の標高225mほどを計るあたりの幅10m・長さ25mばかりの平面がく字形をした曲輪が俗に信長丸と言われる。それより北約230mの8×12mの曲輪を中心にして周囲に帯曲輪を設け、北及び東方向に土塁を築いた4層からなる曲輪群がある。ここは秀吉が陣を置いたところとされる。遺存度は極めて良好で、その構造等からこの部分が虎御前山の中核をなしたと考えられる。ここより東と北の2方向に支尾根が伸び、更に平坦地が続き、北は柴田勝家陣という曲輪までたどりつくというのが基本的な構造である。



小谷城(左奥)と虎御前山(右)

ここでは主要な曲輪をつなぐ道状の平坦地は一見長い曲輪状であるが、実際には余り手を加えていないようであり、斜面の遺構についても不明な点が多いが、これまで知られた規模や細部での構造等からこれは陣跡や砦というより中世の山城と呼ぶにふさわしいものであると言えるだろう。(用田政晴)

註

- (1) 『信長公記』は本来『信長記』と言うが、後に小瀬甫庵による『信長記』が書かれたため、これと区別するため『信長公記』と称するようになった。

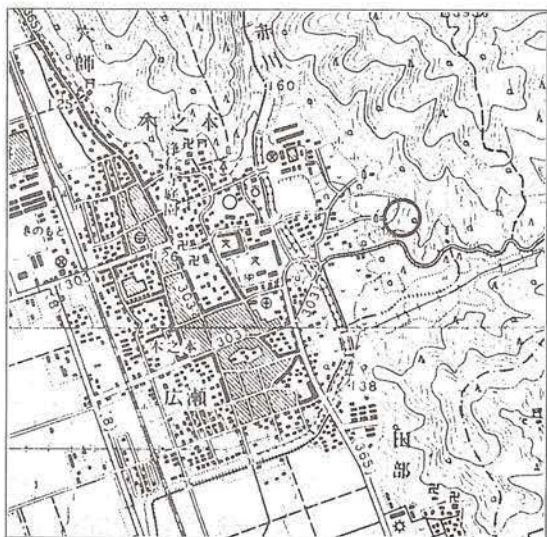
108. 伊香郡木之本町木之本発見の ハマグリの入った須恵器

1

昭和42年秋、所用で現国道303号線の木之本町木之本の東方に所在する当鳥トンネルの西方を通りかかったところ、道路の北側に所在する土取場の頂上付近に、古墳の墳丘状に土の黒い部分が露出しているのが望見された。そこで急坂を約30mよじ昇り、この黒色の土の部分を実査したところ、古墳が真二つに断ち切られ、ここに報告する須恵器が落下寸前の状態で露出していた。

2

この古墳の位置は、丹生川の右岸に所在する大箕山より南方に続く山地が、木之本より川合に通ずる国道



出土地点位置図

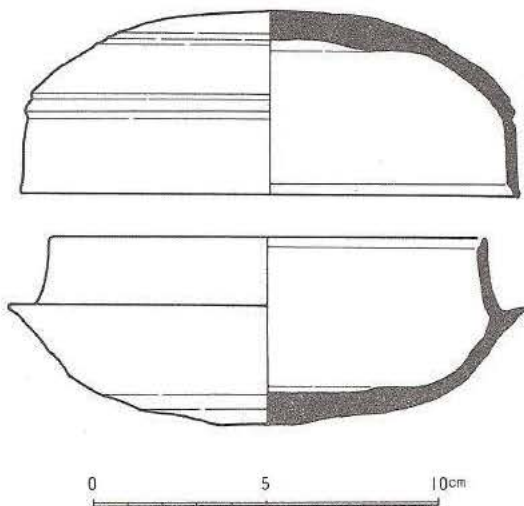
の部分にて鞍部を形成し、これより西方に連なる南斜面に派生した一支丘上に築造されたものである。墳丘の規模については、黒色の土の断面状況より推定すると、直径約8m、高さ1.5m程度の円墳と思われる。また、埋葬については、木棺直葬かと考えられる。

3

ここに報告する須恵器は、一具をなすものであって、中にはハマグリ(蛤)の殻が三個体分収納されていた。以下外見上の形態について説明すると、

(蓋) 口径14.6cm、器高5.4cm、稜径14.3cmを有し、天井部は丸い。口縁部との境には稜を有するがやや鈍い。口縁部はやや内湾ぎみに開き、端部は外側に開く。また内側には、内傾する段を有し、一連の稜を有している。天井部は、大部分がへら削りで調整されている。胎土は密であって、少量の砂を含み、焼成は堅緻である。色調は、黒灰色を呈している。

(坏) 口径12.6cm、器高5.4cm、受部径15.1cm。底部は、やや平らである。受部は、上方に向かって内湾ぎみに立ち上っており、端部は丸い。内側には、内傾する段を有している。また、内側底部には、大型の須恵器等に見られる叩き当具の同心円文の一部が付けられている。底部は、へら削りで仕上げられている。胎土は密であって、処々に白色の砂粒を含んでいる。焼成は堅緻であって、色調は青灰色を呈している。



4

ここに報告した須恵器については、大略5世紀末～6世紀初頭頃と推定されるが、注目すべきは、中に収容されていたハマグリ(蛤)の殻である。このことは、海岸より遠隔の地である本地方に到る当時の交通、交易の経路、形態等を究明する上に一資料を提供するものであり、当時の葬送時における、供献の形態を物語る一様相を知る事が出来る。(佐藤宗男)

109. 帰帆島に古代集落の復元

— ニュース —

滋賀県湖南中部流域下水道事務所では、湖南浄化センターの所在する草津市矢橋地先の帰帆島内に、弥生時代の集落の復元を計画し、来る4月1日のオープンをめざして目下急ピッチで作業を進めています。

大、小の竪穴住居各1棟、高床倉庫1棟、銅鐸を祭る広場と水田が主な集落の構成です。集落の背後には弥生時代の森も計画されています。

今回復元される竪穴住居は、弥生時代には知られておらない縄の使用を一切やめ、材木の結合にはすべてつるを使用しています。また、木材の木口(端面)ものこぎりで切断せず、すべて手斧で切断するなど当時の工法で作業がなされています。

高床倉庫は、銅鐸の絵画や土器に描かれたもので著名な棟持柱をもつ倉を復元していますが、集落地のなかで棟持柱をもつ倉がいまだに発見されておらないことが気になるようです。

銅鐸は大岩山出土の流水紋銅鐸を複製し実際に木の枝につるします。銅鐸がどのようにしてどこで祭られ

たのか、本当に祭りの道具なのか、など問題はありますが、やはり弥生時代の集落の復元には欠かせないものです。

なお、複製品はこのほかにも杵や臼、農具や石庖丁、弓矢などもあり、竪穴住居のなかに備えてあります。当時の生活復元的一端がくみとれるように配慮されていますが、経費の都合等で完全な生活復元には至っていないので、今後の一層の整備が望まれます。

これらの施設のほか、入口に設置されたコンクリートウォールには、稲作農耕文化の渡来からその生活の様子、さらには、魏志倭人伝の抜粋によって、国々の統合から古墳文化の成立までを図案化しています。

公園内にはさらにいくつかの私たちが驚かすモニュメントがあるやに聞いておりますが、それらについてはオープン後の見学時に充分堪能して下さいとのことでした。



古代集落の復元作業状況